

## 第2回わかやまの棚田・段々畑サミットを開催

平成27年10月15日（木）～16日（金）の2日間、那智勝浦町において、「第2回わかやまの棚田・段々畑サミット」を開催しました。16日のシンポジウムには307名の参加があり、棚田等の保全と移住・定住を促進する地域づくりについて、県内外の取り組みを学びました。

## 1) 開催概要

和歌山県では「和歌山県棚田等保全連絡協議会」（※1）を中心に、棚田・段々畑の保全活動や組織間の情報交換を支援しています。

平成25年に「第19回全国棚田（千枚田）サミット」が有田川町で開催されたことを契機に、平成26年から「わかやまの棚田・段々畑サミット」を開催しています。

平成27年は那智勝浦町を開催地として「～耕して生きる棚田の暮らし～ 仲間とともに」をテーマに、現地見学会・講演会・事例発表・パネルディスカッションを行いました。

## 【※1 和歌山県棚田等保全連絡協議会】

県内23市町村、県土地改良事業団体連合会、県農業協同組合中央会、並びに6つの棚田保全団体で組織する協議会

## 2) 10月15日（現地見学会）

1日目は、小阪地区と口色川地区の現地見学会を行いました。さわやかな秋晴れの下、71名の方々に参加いただき、風情あふれる棚田を体感していただきました。

小阪地区は熊野三山で有名な那智山の懐深くにあり、美しい日本の村景観コンテスト（農林水産省）に選ばれた地域で、平成17年から移住者を中心とする保全団体「棚田を守ろう会」が、約40a・80枚の棚田の保全活動を行っています。

口色川地区は移住者が人口の半数近くを占めており、高齢化率が40%以下であり、平成21年には日本の里100選（朝日新聞社／（公財）森林文化協会）に選ばれた地域です。

材木で生計を立てるため棚田に植林が行われ、現在は農業と林業を両輪とした産業構造となっています。

「小阪の棚田」



口色川の植林された棚田跡



現地見学会終了後は、ホテル浦島で地域の名産品を用意し、交流会を開催しました。109名に参加いただき、地域の取り組みや課題等について、夜遅くまで活発に意見交換が行われました。

交流会



地域の名産品（マグロ刺身、めはり寿司、サンマ寿司等）



3) 10月16日(シンポジウム)

2日目はホテル浦島にて実施しました。棚田保全団体による活動紹介や産品販売とともに、地域活動のヒントとなるよう多面的

機能支払および中山間地域等直接支払制度を活用した各地の取り組みを紹介しました。

また、昼食は那智勝浦町の食材にこだわったお弁当を用意しました。



開会の後、“わかやまの美しい棚田・段々畑(※2)”認定証授与式を行いました。

この制度は、過疎化、高齢化の進む中山間地域において、棚田・段々畑を守っている保全団体ならびに地域を認定するもので、今年度は3地区(※3)認定しました。

今後も、基準に達した地区を認定し、耕作を続ける地域の取り組みに対する理解を促すため、活動内容等の情報を県内外に発信することで、都市住民等との交流促進による地域活性化につなげていきたいと考えています。



【※2 わかやまの美しい棚田・段々畑の基準】

- (1) 地形勾配がおおむね20分の1以上の階段状の水田または畑であり、美しい景観が保全されている地区。
- (2) 概ね1ha以上の団地を構成
- (3) 農地の維持管理が行われており、今後も継続して行われる見込みであること。
- (4) 地域の特色を生かした共同の営農活動、他地域との交流活動、環境保全活動、その他の保全活動に取り組んでいるまたは取り組む予定地区であること。

【※3 平成27年度認定地区 ( )内は保全団体】

- ・有田川町 沼谷(天空)の棚田 (沼谷区)
- ・田辺市 温川ぬるみがわの棚田 (温川区)
- ・那智勝浦町 南平野の棚田 (南平野区)

シンポジウムは、基調講演と県の移住・定住推進の取組紹介、事例発表3例、パネルディスカッションの構成で実施しました。

基調講演では、NPO法人吉備野工房ちみちの加藤せい子理事長が「地域を耕し、美のバトンを受け取る地域づくり」と題して、人材育成体験プログラム「みちくさ小道」の事例と役割を紹介するとともに、誰もが持っている「知恵」、「知識」、「人のつながり」すべてを「価値」に変えることができることを教えていただきました。



「観光」とは地域を訪れ、そこで買い物、宿泊することによる産業であり、その地域の人やモノがあって成り立つものである。そのため、人やモノを育てることが産業にとって、ひいては地域づくりにとって重要であることを感じることができました。

次に、県が実施している「田舎暮らし応援県わかやま」について、過疎対策課より紹介いただきました。

移住・定住には官民連携の支援と受入団体の確保が重要なことでした。また、色川へ2年前に移住した方から、移住のきっかけや色川での仕事について報告いただきました。

事例報告では、(有)はたやま夢楽の<sup>むら</sup>小松圭子氏が「はたやま夢楽からの報告」と題して、採卵用の鶏「土佐ジロー」の食肉利用とそれを活かした「はたやま憩いの家」の運営により、地域の宝（人・土地）を基軸として畑山集落が生き抜くための手法について報告されました。

価値を高めるためには手間（労力と時間）が重要であり、単一ではなく複合的な産業を形成することでさらに価値を高めることを学びました。

次に、和歌山大学の農業農村交流サークル agric. より「援農を通じた地域と学生の交流」と題して、県内3か所で活動している農作業支援の事例を報告されました。

学生が地域に入って農作業を行うことが、やがて地域の産品開発やお祭りなど地域行事の支援に発展し、地域に活力を与えていくことから、この活動が大変有意義であると感じました。

次に、昨年度「わかやまの美しい棚田・段々畑」に認定され、昨日見学した小阪の棚田で保全活動を実施している棚田を守ろう会より「棚田を守ろう会の活動と思い」と題してお話いただきました。平成16年から始まった活動を通じ、「先人の思いを受け継いでこの山村で暮らしていきたい」という純粋な思いで棚田を耕していることが感じられました。

その後、和歌山大学観光学部教授大浦由美氏をコーディネーター、NPO法人棚田ネットワーク代表中島峰広氏をアドバイザー、棚田学会会長千賀裕太郎氏をフロアアドバイザー、基調講演者、事例報告者をパネリストとして、①担い手の確保、②外部からのサポート、③仕事づくり（価値の上乗せ）の3つを論点にパネルディスカッションを行いました。

地域への愛着心は幼少期から地域で活動する（遊ぶ）ことで育まれること、外部サポートは地域が受け入れ体制を整備して気長に待つこと、仕事づくりは生産原価を考えた価格設定とそれに付随する価値を理解してもらうことが討論されました。

農山村集落での産業化には価値を高めることが重要であるが、手間が必要である。その手間に価値を見出す消費者が増えていることをチャンスと捉え、手間を「見える化」することで消費拡大につなげる必要があると感じました。

## 5) おわりに

「棚田・段々畑」、「文化・伝統」や「特産品」といった地域の資源を活かし、“そこで暮らす”ということを中心に外部と交流し、移住・定住へつなげることについて学ぶことができました。

県としては、人口減少が顕著である中山間地の農業の継続を図るため「中山間ふるさと・水と土保全基金」を財源とする支援策や他部局との連携により、地域の活性化を応援していきます。

次回は、昨年度“わかやまの美しい棚田・段々畑”に認定された「芋谷の棚田」がある橋本市です。ぜひご参加いただきますようよろしくお願いいたします。

